

HYPERNETFLASH

地域における ハイパーネットワーク社会をめざして

公文 俊平

(ハイパーネットワーク社会研究所所長)

別府湾会議を終えて

ハイパーネットワーク社会研究所の主な使命は、情報革命と呼ばれるような現代の大きな社会変化の動向を見定めながら、日本のかなに、とりわけ日本のさまざまな地域に、ハイパーネットワーク社会と呼んでいる新しい社会を実現していく手助けをしていくところにあります。

昨年一年は、3つのワークショップをおこなって、現在の情報革命の新しい動向をいろいろ勉強してきました。また、ワークショップの成果などを背景に、3月3日から4日の二日間にかけて、三度目の別府湾会議を開催しました。準備期間は短かったのですが、これまでの二回よりもさらに大きな反響がありました。海外からもゲストがたくさん見えたし、県外からもたくさんの参加者があつて、非常に熱気のある議論がいろいろな形で盛り上がりました。

そういう意味では、我々がハイパー研としてやってきたことは間違いではなかったと確信をもちました。同時に、この情報革命の動きは単にひとつの研究所が啓蒙するとか、細々と実験するものではなく、地域全体、世界全体が現在取り組まなければならない問題であること、そして我々は未来の話をしているのでなく現在の話をし

ているのだということを改めて感じた次第です。

情報革命による大きな社会変化。いま使える技術によって生産性が向上

さて、ワークショップや別府湾会議開催を通してわかつてきることは、情報革命には2つの側面があるということです。

ひとつは、情報革命は産業革命であり、それも第三次の産業革命であるということです。産業革命では新しい技術の革新がおこなわれ、生産性や効率が上がります。つまりモノの値段は安くなり、そしてまた新しい産業ができていきます。情報革命における新しい産業は、情報産業、あるいは情報サービス産業、新しい通信産業というところにあります。情報革命において生産性が上がるということは、この新しい情報産業や情報サービス産業、新しい通信産業の提供してくれる効率的な通信機能や情報処理機能をつかって、企業であればビジネスをおこなう、行政であればその行政の業務をおこなう、個人であれば自分の生活のなかでこれを利用する、ということで効率が上がることを意味します。

とりわけ、これまで生産性を上げるのがむずかしいと言われたオフィスの仕事の効率が非常に上

がるでしょう。あるいは、「機械でモノをつくるところは生産性が上がるが、それ以外の生産性を上げるのはなかなかむずかしい」と言っていたサービス労働の生産性も上がります。このように、いま大きな変化が起こっていることが、だんだんわかってきたのです。

最初のうちは、情報革命と言ふと、テレビが双方向化するのかとか、映画を自由に選択して見ることができるムービー・オン・デマンドになるのかなど、娯楽とマスメディアの延長線上に未来をみる傾向が強かったといえます。それももちろんあるでしょうが、実際にはまだつかえる技術はないし、値段もそう安くなるわけではありません。むしろいま起こっているのは、文書の整理やビジネスにかかるコミュニケーションの効率を上げること、たとえば電子メールを使うことなどです。そこにマルチメディアも入ってきて、図面と一緒に送ることができるとか、テレビ会議ができる、在宅勤務ができる、ホームショッピングができるなどの話になっているのです。

産業革命としての情報革命の意味は、企業や行政がそれをさっそく利用して、生産性を上げ、値段を下げているところにあります。公共料金も下げられるはずですし、税金もそれほどあげなくてよ

いでしょう。医療費がどんどん上がり社会保障負担はこれから増えていく一方だと言われていますが、情報革命によって、それほど負担を上げなくても質のよい医療サービスが受けられるようになります。また、教育費が高いと嘆いていますが、ここでもそれほどお金をかけなくても質のよい教育が受けられる可能性が見えてきました。

これは東京の大企業の人や大都市に住んでいる人たちだけが享受できることではなく、日本中あるいは世界中の人が恩恵を得ることができます。またできるようにならなければなりません。できるようにすることが、全国的な情報基盤をつくることにあるのです。

情報革命は新しい社会革命でもある。電子市民による電子デモクラシー

もうひとつわかつてきただのは、この情報革命は単なる産業革命ではないことです。新しい社会革命の面があります。つまり、これまでマスメディアから娯楽やニュースなどの情報を一方的に受け取るだけだった市民が、自分たちで積極的に情報を集めるようになる、情報をつくり出すようになる、発信するようになる、ということです。自分で本を書いたり絵を描いたり写真やビデオを撮ったりして、自分の作品をどんどん発信できるようになります。あるいは、電子ネットワークを使って意見を交換したり議論をまとめたり大きな運動を起こしたりすることもできます。これは電子市民とか電子デモクラシーと言われています。

いま、個々の市民が自分の生活の質をよくするために、また社会を変えていくために、情報革命が生み出す新しい産業や技術を使う

ことができるという変化が起きてはじめていることがあきらかになってきたのです。つまり、産業だけでなく、社会生活まで変化が起きています。

とくにアメリカの場合は昨年新しいゴールドラッシュと言われ、ケーブルテレビ会社や電話会社が、ビデオ・オン・デマンド的なところにこれからマルチメディアの本命があるのではないかと企業合併したり実験したりしましたが、どうやらそれはまだ早すぎる、そうではなくもっと地道な日常業務につかうことが大事だとわかつてきました。

そのためには、ただ民間の競争だけにまかせておくわけにはいかず、政府、とくに自治体と市民が積極的に情報基盤づくりに関与していくかなければならないということもわかつてきました。

現在の技術やネットワークを使っての地域実験を。情報基盤はインターネット

日本でもいよいよこれから情報基盤づくりや実験が始まります。その実験の意味は5年先、10年先にやっと本格的に実現するものをいま少しだけやってみようということではなく、現在ある技術やネットワークをつかって、どうすれば自分たちのビジネスや生活を変えていくことができるのかということなのです。仕事のしかたや生活のしかたをどのようにうまく変えて、もっとおもしろいもの、もっと効率的なもの、もっと多様なものにしていくのかを実際にやってみようではないかということです。

ハイパー研としても、そういう意味で日本や外国ではどんな実験があるか、どんな実例があるかをぜひ調べたいし、実際に大分という地域を対象にして、その地域の

なかでいろいろな試みがおこなわれていくのを支援したいと考えています。

そういう点で考えると、いま現にどんどん発展している情報基盤の最たるものはインターネット、つまりコンピューターのネットのネットワークにほかなりません。インターネットによって、これまで、情報処理、通信と別々になっていたものがひとつになったのです。

このインターネットが、いま世界中で爆発的に成長しています。今年のはじめに、ユーザー数が2,000万人と言われていましたが、5月にはおそらく4,000万人になつたでしょう。年末には1億人になり、来年には2億人を越えると言われています。歴史的に言うとほんの一瞬間、ほんの数年で、ゼロから何億とネットワークのユーザー数が爆発する、1年間に最低4倍になるということです。

したがって、いまはまだインターネットを見たことがないとか、コンピューター・ネットワークって何と言っていても、2~3年たてばそれはどこにでもあるようになり、いま我々が電話やテレビをあたりまえに使うのと同じように、入びとはコンピューターのネットワークに囲まれて暮らすようになります。市役所の窓口のつきあいや税務署とのつきあい、病院も学校もショッピング、切符の予約からその他ありとあらゆることが、このネットワークを使ってとても簡単にできるようになる、それがハイパネットワーク社会なのです。

いま起こっていることは、そのような変化が本当にあつという間に起こっている、ということです。だから、そのあつという間の動きにあわせて、大分でもいろいろなことをやっていきたいし、早く進めていきたいと思っています。

別府湾会議を終えて

3月3日から4日の2日間にわたくって開催された別府湾会議は、350人におよぶ方々の参加をいただき、大盛況のうちに終わることができました。

はじめて大分の日出町の厚生年金休暇センターで「ハイパーネットワーク日出会議」が開催されたのは、1990年3月のことでした。豊の国情報ネットワークができるころ、コアラ事務局長の尾野徹さんから「ハイパー端末を自由に扱える“ハイパーネットワーク”“ハイパーコアラ”」をめざそうというアイデアが提案されたことがきっかけでした。

1990年に続いて、1992年に「ハイパーネットワーク別府湾会議」という名称にして、同じく日出町で開催、第3回目となった今回の会議は、第1日は大分市内の東洋ホテル、第2日は日出町に移り、前回、前々回にも増して、熱心な討議や交流がありました。

参加者から寄せられたアンケートでは、「プライバシーやセキュ

リティについて米国側から強い関心を示されたことが印象的だった。日本ではプライバシー等についての関心がなさすぎる。この議論をもっとやらねば、行政の情報のビジネス化も無理」、「現在の本会議のふんい気は全体として『ネットワークを知った者が知らない者の蒙を啓くことで仲間を増やす』という一段上から下を見る姿勢が感じられる。ネットワーカーでない市民からの視点を忘れないでほしい」といった意見や、「こんなに密度の濃い会議ははじめて」、「質疑応答の時間を増やしてほしい」、「コンピュータを使っている核である18才～25才くらいの若者が参加できるようにしたらどうか」など、会議の開催方法に対する要望などがありました。会議での討議内容や運営全般については、概ね「よかったです」という感

想が多かったようです。また、「大分での地域実験を推進したい」、「地域実験で得られた経験、ノウハウなどを公表してほしい」というコメントもあり、大分での地域実験に対する関心の高さがうかがえました。

遠く海外をはじめ、各地から駆けつけていただいたゲストの皆さん、様々な裏方作業をしていただいたボランティアの皆さん、とにかく地元大分の企業、市民の皆さん、協賛・後援していただいた企業および関係省庁・組織の皆さん、そして最後まで熱心に参加してくださった参加者の皆さんに、この紙上を借りてあらためてあつく御礼申しあげます。



平松知事を囲んで、ハリー・ソール夫妻。



ハイパーネットワーク社会研究所の公文俊平所長。右隣がミッチ・ケイパー氏、左隣にユー・キョンヒー氏



COARAを紹介する尾野徹事務局長とCOARA会員の山崎佐和子さん。



大スクリーンを見ながらの円卓会議。コンピューターを駆使してビジュアル・プレゼンテーションがおこなわれた。

●COARA「94別府湾会議メイン」から（抜粋）

今回の別府湾会議でも、恒例の電子会議をコアラの上で開催しました。とくにコアラ会員の有志の皆さんに議長を引き受けていただき、いつもにも増して活発な討論が続きました。

以下のその一端をご紹介します。電子会議未経験の皆さん、できればコアラに入会して、この討論の続きを積極的に参加されることを呼びかけます。

発言0054(01802/永野 美恵子 /Mie)
94/03/04 22:45* 62回*レスポンス12個
1001字(文字):別府湾会議が終わりました。

私も、2日間を通して参加できまして本当に幸でした。いろんなことを一杯勉強させていただきました。

とにかく遠路たくさん来てくださった皆様を無事、お見送りすることができました。私も家に帰りついて、資料を見直していくいろいろなことを興奮して思い出しています。きっとこれからが、別府湾会議の本番なんだと思います、私としてできることは、これからも毎日、時間を見つけてコアラをすることかなと思いました。

Mie

@レスポンス 003(00367/清水 保雄 /はねちゃん)94/03/05 21:23* 56回
575字:今回は通信機能付ワープロを抱えて行ったのですが

今回は通信機能付ワープロを抱えて行ったのですが、当日（3日）の集合時間などの情報を事前に入手することが出来まして、気持ちの上で余裕を持って行動することが出来ました。やはり移動時の必需品ですね〔音響カプラを持って行けなくて残念でしたが〕

今回参加の全ての皆さんに、「お疲れさまでした」と声をかけたい心境です

@レスポンス 004(00724/山崎一樹 /J.BOY)
94/03/05 22:04* 56回
1079字:お疲れさまデシタ

別府湾会議関係者の皆様方、大変お疲れさまでした。おそらくエクスカーションに参加の皆さんもそれぞれお帰りになられたでしょうし、COARAの皆さんの打ち上げ会も終わったのでしょうか。

今回もまた、とても刺激を受けた大分行きました。セッションの司会までさせてもらいましたが、慣れないシロートが「猛獸」相手に司会をするってのは、ホント無謀な企てで

した。Mieさんにはお誉めのコトバを頂きましたが、何とか最後までたどり着いたというのがホントのところでしたよね、井上さん？？ とはいえ、とてもイイ経験をさせてもらいました。

ちなみに、最後のセッションで坪田さんが「ヨメさんからは「大分にイイ女でもいるのではないか」といつも言われる」というようなことをおっしゃっていましたが、私も全く同じことをよく言われますノデ、何かホッとしました。でも、帰りにこの話を浜野先生にしたら、「山崎さん、奥さんからまだ外でモテると思われてるんですね。」

とキツいお言葉をいただきまして、ガクっときましたケド。

とは言え、これだけ「熱い思い」を持っている応援団がイッパイいるということだけは間違いませんネ。

最後にもう一度、いろいろな形で参加されたCOARAの皆さん、どうもご苦労さまでした。

J.BOY

@レスポンス 008(01183/村上 正人 /GARCON)94/03/06 17:51* 54回
578字:お疲れさまでした

毎度、村上です。

別府湾会議お疲れさまでした。

今回も写真・ビデオ撮影のお手伝いをさせていただきました。

なんとか撮れていると思いますが・・・

ワークショップと較べてカンファレンスはやっぱり規模が大きくてスゴイですね

最新の機材なんかがボコボコと置いてあってカッコよかったです。

で、「真夜中の楽しみセッション」を前の方で楽しめていた皆さん、しっかりと

その模様をビデオに撮っていますよ～～～(^)

(このテープはハイパー研の資料として永久保存されるはずですので、ご覚悟を！)

なにはともあれ、これから透明なネットワーク社会に期待しています。

発言0055(00285/佐々木義朗 ルインボーハ^ハ)94/03/06 13:55* 60回*レスポンス 5個
1115字(文字): 94 BBCも終了しましたね

仮に大分で地域実験をはじめると言った場合、じゃ、なにから？ということになると思います。

ユーザーとしてアイディアを出すだけで、後の実行は知らないうちに進んでいたなんて事になるのは嫌ですから、専門分野に研究を行うとともに、そういう情報についてもいち早くこの電子会議から入手したいと思います。

新聞などを見ると、平松県知事は、福祉と医療を中心にお考えのようですから、「マルチメディアと福祉」とか、「マルチメディアと医療」といった研究を行う事からはじめてみてはどうでしょうか。

そしてだんだん輪を広げていくといいと思います。

例えば、コンピュータ屋さんが福祉の事を考えても、ロクな事にはならないでしょうして福関係者がコンピュータの事を考えてもたいた事にはならないと思います。

要は、New COARAがこれまでに培ってきたネットワークをもっと研究のために有効利用して、より多くのコンピュータ関係者と福関係者が親密なネットワークを持つ事と、それをオープン会議室で議論する事で、その会議に参加している一般の人も考える事が出来るようになります、またそれぞれの違った専門分野からの考え方、いわゆる「文殊の知恵」をたくさん出していく事が大事な事ではないかと考えています。

どうでしょうか？

@レスポンス 001(00724/山崎一樹 /J.BOY)
94/03/06 22:16* 57回
459字:いや、全くそのとおりだと思います。

いや、全くそのとおりだと思います。

最後のセッションで、「専門家は問題点の指摘をしなければいけない。」というご批判があり、時間がなかったのでその場ではフォローできませんでしたが、逆に、それぞれの分野の専門家のの方々は、問題点をクリアする方法を考えることもしてもらわなければならぬのだと私は思います。

そのためには、容易でないことは十分承知の上で、専門家とユーザーとが議論をしていくことが地域実験においては欠かせないことなのではないでしょうか？

J.BOY

☆コアラへの入会申込：コアラ事務局 ((社)大分県地域経済情報センター内)

までお願いします。オンラインでも申し込めます。

〒870 大分県大分市東春日町17-20 ソフトパーク内 Tel: 0975-34-5696

COARAアクセスポイント 大分: 0975-32-9897 2400bps, 0975-32-9994 9600bps

福岡: 092-611-6983 東京: 03-5388-4864 DDX-TP = 163-060-973-2127

Tri-Pホスト名: COARA TYMPASホスト名: No.658

別府湾会議◆関連記事一覧

今回の別府湾会議は、ハイパーネットワーク社会研究所設立後初めての会議であり、しかも大分での地域実験構想も伝えられているところから、メディアの関心も高く、以下のように多数の新聞・雑誌、放送などで取り上げられました。

とくに大分ケーブルテレビ放送は、3月3日の会議の模様を、全編生中継で放映する力の入れようでした。

2月

●「ハイパーネット会議プロデューサー 会津泉さん／利用者主役へ仕組み探る」朝日新聞 940221

●「ハイパーネット社会」で国際会議 来月3-4日大分で開く 日刊工業新聞 940224

●「ハイパーネット会議 大分で来月開催 市民や研究者内外から300人参加」流通サービス新聞 940225

3月

●「21世紀の“情報先進地”へハイパーネットワーク'94別府湾会議 基盤整備の道を探る」大分合同新聞 940304

●「市民主体の地域実験を－ハイパーネットワーク'94別府湾会議 見えてきた情報化社会

広報おおいた'94年号



▲平松知事は「ハイパーネットワークと地域社会の新しい風」と題して特別講演。医療福祉など地域住民に役立つるチケットアの実験を大分でやりたい



△会議場の外では各企業のデモンストレーションや、世界中のインターネットの実演が行われた。

会の未来」西日本新聞 940314

4月

●「21世紀、地域にあって、新しいグローバルな情報ネットワークをどう利用していくのか－ハイパーネットワーク'94 別府湾会議」、「広報おおいた」、大分県広報公聴課、94年4月号

●「情報センターフラッシュ “ハイパーネットワーク'94別府湾会議”」、「情報おおいた」、大分県地域経済情報センター、94年4月号

●「そこまで来ている電網国際社会へ向けて ハイパーネットワーク'94別府湾会議」、「LoGiN」、アスキー、1994.4/15 No.8

5月

●「コンピュータがメディアになる日」金村公一、「oh! PC」、ソフトバンク

◆報道番組

3月

2日 14:15-14:30 OBS(大分放送)ラジオ=会津泉「地域の話題のコーナー」出演、別府湾会議を説明。

3日 13:00-18:00 OCT(大分ケーブルテレビ放送)=別府湾会議 1日目の模様を生中継。

西日本新聞1994年3月14日

27日 10:30-11:00 OBS(大分放送)テレビ「サンダーEYE」で別府湾会議を特集。また、平松知事とハリーソール氏(スマートバー公社社長)との対談を放映。

5月

30日 14:00-14:30 自治体衛星通信機構=ハイパーネットワーク'94別府湾会議を全国放映。

高密度情報時代の地域像を探る「ハイパーネットワーク別府湾会議」が、ほど大分市立日出町で開かれた。世界のトップクラスの専門家会議で充実した議論が展開された。大分県は、会議にも多くの分野の先駆者。議論の中で浮かんだ懸念される問題には、「地域社会とは」を、議論に「民間参加した記者が報告する」。

多彩なアイデア

地域情報化の可能性的存

在、パソコン通信「LoGiN」

コラボ(本部・大分)は、

大学の講義、実習等か

ら人生相談、結婚の相談探

しなば、百件以上の「二十一

クな案を披露した。

例えマテジタル美術館

II世界中の美術館の作品を

通信網で高品質で鑑賞へ

ハイ投票(高齢者や病人)

所長は、「大豪華な」。もつ

も自宅や病院からオーライ

と実験を重ね、実施に移し

投票用ハイパ

ハイパー研 活動報告

【これまでの活動報告】

93年度の研究活動の柱であるワークショップを以下のように開催しました。8月5日～7日「バーチャルワールド」、8月6日～8日「デジタルワールド」に続き、10月28日～30日に「グローカルワールド」を、「12月2日～4日に第2回の「バーチャルワールド／デジタルワールド」を、それぞれ大分県内のリゾート地で開催しました。

「グローカルワールド・ワークショップ」では、公文俊平所長を中心に、米国的情報化動向を学びながら、21世紀システムの社会基盤としての地域ネットワークについて考えました。地域ネットワークがグローバルな意義をもつためにはどうすればいいのかを検討し、その結果、いまこそ本格的に地域

情報化を実践すべきで、そのためにはグローバルな広がりを持ちながらローカルな視点を持ち、新しい地域実験を具体的に構想することが重要との結論を得ました。

第2回「バーチャルワールド／デジタルワールド・ワークショップ」では、公文俊平所長、浜野保樹研究主査を中心に、それまでの議論をさらに発展させ、きたるべきハイパーネットワーク社会に向けて、今後どのような取り組みをすべきか検討を加え、かなり具体的な方向性を得ました。すなわち、地域には市民主導型の自律的なネットワークを構築することが重要であり、そのためにも、地域実験を早期実施することが必要だというものです。

これらの成果を踏まえ、94年3月3～4日、「ハイパーネットワーク'94別府湾会議」を開催しま

した。海外からは、1990年の第1回から参加しているハワード・ラインゴールドさんをはじめ、7人のゲスト・スピーカーをお招きし、国内のスピーカー、参加者も交えて、計350名でたいへん熱心な討議を行ない、大分での地域実験に向かう環境が整いつつあることが実感されました。

【今後の予定】

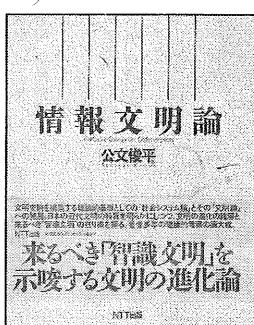
94年度は、95年度からの本格的な地域でのマルチメディア・ネットワーク実験の実施に向けて準備にあたる年と位置付け、各種の活動を予定しています。とくに大分では、地元の市民および企業の皆さんを対象として、定期的なセミナーや勉強会を開催する予定で第1回を7月に開催します。また、今年秋にワークショップを開催する予定です。

主なアウトプット

◆著書

ハイパーネットワーク社会研究所の活動に直接かかわる著書が、以下の3冊刊行されました。よろしければぜひお求めください。

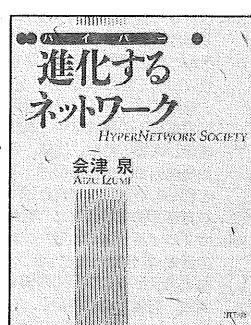
- ・公文俊平『情報文明論』(1994年4月NTT出版・5500円)
- ・尾野徹『電子の国「COARA」』(1994年5月エーアイ出版・2300円)
- ・会津泉『進化するネットワーク』(1994年7月NTT出版・2400円)



情報文明論



電子の国「COARA」



進化するネットワーク

関する調査報告書（通産省受託）

- ・大分県におけるパソコン等を利用した交流ネットワークの拡充を通じた地域振興に関する調査報告書（国土庁四全総推進調査地域支援基礎調査）

◆関連参考書

当研究所のワークショップに共同研究員として参加された方々の近著を紹介します。

- ・浜野保樹『マルチメディアマインド』(1993年12月BNN)、同『マルチメディア』(1993年12月岩波書店)
- ・杉井鏡生『ネットワーク・カンパニー』(1994年1月エーアイ出版)
- ・合庭惇『デジタル羊の夢』(1994年5月河出書房新社)
- ・佐倉統『動きはじめた人工生命』(1993年11月同文書院)
- ・人工生命研究会編『人工生命』(1994年5月共立出版)
- ・坪田知己『マルチメディア組織革命』(1994年4月東急エージェンシー)
- ・斎藤伸久共著・橋本典明監修NHK・SMTVグループ著『インタラクティブTV』(1994年5月工業調査会)

大分 Now!

市民民主導型の ネットワーク社会をめざして

ハイパーネットワーク社会で重要なと思われるキーワードに、「グローカル」つまり「ローカル（住民や企業が本当に活動する地域に根ざす）」にして「グローバル（世界中の地域が一体となって交流する）」という言葉があります。ここでは、「ローカル」な部分にまず注目して、日本の地域の一つの典型と考えられる大分という視点を通して、ハイパーネットワーク社会のあり方について考えてみようと思います。

●ローカルにしてグローバルである視点の大切さ

大分には、自主的に情報化に取り組んでいるユーザーグループが多数あります。なかでも、地域におけるコミュニケーションにパソコン通信によるネットワークを利用する、コアラを中心としたネットワーク・コミュニティが早くから存在していたことは特筆すべきことで、ハイパー研が大分に設立された大きな理由もあります。

最近、コアラの生い立ちを紹介した本が出版されました。コアラの事務局長の尾野徹さんによって書かれた『電子の国「COARA』』（エーアイ出版）です。今回の「大分Now!」では、この本の紹介を通して、大分の情報化とハイパー研の関わりを取り上げたいと思います。

●コアラの運営は「情報市民公社」構想の中にある

『企業管理型、国家管理型、市民管理型それぞれにメリット／デメリットがあって一つに頼れず、結局は「それらの複合型の市民民主導型」という新しい経営体が母体となる「情報ユーティリティ」であってほしい』（『電子の国「COARA』』214頁）

『増田米二氏の情報市民公社そのものだ。コアラ内では「情報生協」という言葉も出てきたが、そういった新しい運営体が地域にあることが情報社会をいち早く築くことになるだろうし、居心地のよい未来社会を導き出すはず』（『電子の国「COARA』』268頁）

コアラ（大分パソコン通信アマチュア研究協会：1985年5月発足）は、当初は中小企業の二世経営者らが集まり、パソコン通信利用を考える研究会として出発しました。その後、利用者の増大とサービスの多様化に対応するために、1993年4月からは県民のためのパソコン通信公共通信網「ニューCOARA」として再発足しています。

コアラの歴史は、『電子の国「COARA』』に描かれているように、幾多の糾余曲折を経ています。地域に中立なネットワークを構築・運営していくことの困難さは大

変なものです。コアラ発足以来の大分県における情報化の施策は、「豊の国情報ネットワーク」、「ニューCOARA」への発展、ハイパー研の設立等、さまざまな動きが見られますが、コアラは、電子会議での活発な議論を通してそれぞれの施策の現場に常に係わり、大きな影響を与えてきました。それによって、コアラ自身もその姿を変えてきたわけです。コアラの主張の基本には一貫して「市民民主導」、「ネットワークのコミュニケーション利用」の大切さが言われ続けています。

●ハイパー研はコアラの議論の中から生まれた

「私達コアラでは、マルチメディア端末に対応できるネットワークのことを、今のネットワークを超えるネットワークとして『ハイパーネットワーク』と呼び、そのホストシステムの開発が技術的にも社会システム的にも必要だと思っており、社会基盤として誰が設置費用を負担すべきか？などという問題を含めて全般的な統合的に考え始める時期が来たこと。そして、まだどこも本格的にはその研究に取り組んでいないところが重要な点である」と訴えた。

これらは私個人の意見としてなく、コアラの電子会議や例会、オンラインイベントで互いに意見交換や、相談を普段に交わしている中からの意見であることも併せて力説した（『電子の国「COARA』』216頁）

コアラはネットワーク上の議論にとどまらず、オンラインでも積極的に活動し、数多くの全国会議や国際会議の運営に参加し、ハイパーネットワーク社会を考える必



1992年別府湾会議でのコアラ会員によるプレゼンテーション

要性、そういった社会に移行する上での問題点の研究の必要性をアピールし続けてきました。

こうした議論の中から第1回「ハイパネットワーク日出会議」(1990年3月)の冒頭、平松大分県知事が「未来のネットワークを考える研究所」を提案し、1993年3月のハイパネットワーク社会研究所発足につながったわけです。『電子の国「COARA』』を読むと、ハイパー研はまさに市民の議論の中から生まれたことが生き生きと伝わってきます。

●コアラとハイパー研は両輪の輪

尾野さんの言葉を借りれば、ハイパー研の重要な課題は、社会システムとしての地域情報市民公社(RIU:Regional Information Utility)の実現とその運営方法、組織確立方法をいかに導くかにあるということになります。かつ、それらの各地域のRIUを横に連ね、日本列島を電子列島NIU(National Information Utility)として形成し、さらには世界に広がるGIU(Global Information Utility)にいかにして拡大できるかということになります。

ハイパー研としては、RIU構築の議論にコアラの活動を反映し、その延長線上にハイパネットワーク社会の姿を見いだしていくと考えています。コアラにとっては、ハイパネットワーク社会研究所との協働活動を通して、地域ネットワークの運営ノウハウの集積や新技術の導入、グローバルなネットワーク社会への参加・交流などができます。

大分は『生活の中に電子会議を持っている市民』の強みと充実感を、生活実感として経験してきました。これからもさらにその強み、充実感を増すために、もう一度実感を持ち続けられる社会であるように、ハイパネットワーク社会の実現にむけて、両者は両輪の輪として活動し続けていきます。

(武本幹雄・ハイパネットワーク社会研究所)

ハイパー研だより

大分本部

1994年

4月

7日 大分県情報通信高度化検討会／大分県庁内の各部局の情報化担当者28名を集めた文化・情報課主催による大分県情報通信高度化検討会。パソコンを使った情報通信の利用方法のデモンストレーションをおこない、各部局の業務への応用例をアドバイス。

11日 NTT大分支店総務部マルチメディア研修会／NTT大分支店総務部主催。マルチメディアの現状と今後の動向、情報通信分野への応用等について講義。

15日～16日 大分県地域情報・府内情報システム担当者研修会／4月7日の検討会の内容をさらに深めるために開催。大分県木内総室長をはじめ約30名による合宿形式の研修会。ハイパー研として、インターネット、動画像サーバー等のデモンストレーションをおこない、情報化の現状と今後の動向、県庁内業務への利用方法について提案と具体的検討。

5月

12日 COARA会員のインターネット勉強会／COARA会員にインターネットを体験して理解してもらうねらいで開催。ハイパー研でインターネットの概要説明とデモンストレーション。

18日 NTT大分支店マルチメディア研修会／NTT大分支店設備部主催。マルチメディアの現状と今後の動向、情報通信分野への応用等について講義。

31日 大分県警察行政経済セミナー／大分県警察主催、情報通信の現状と動向、マルチメディア等について講義。

6月

15日 別府市役所情報通信勉強会／別府市役所有志による、大分県内の情報化の現状と動向、インターネットの利用方法の勉強会。

東京事務所

●来訪／インターネット見学者(敬称略)

1993年

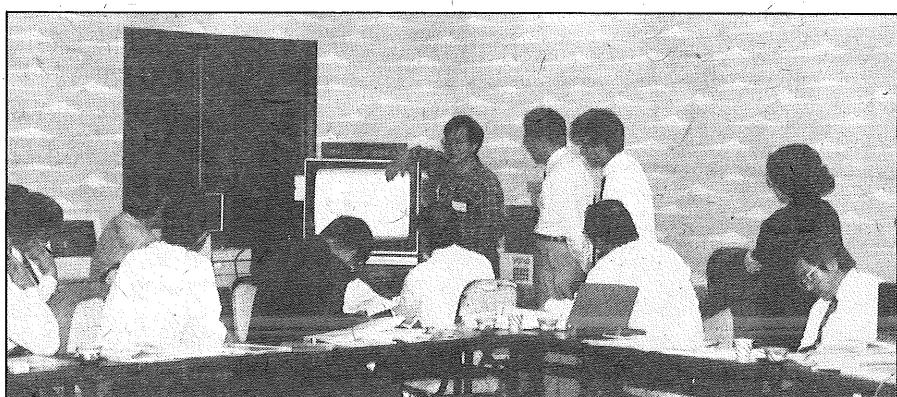
8月 服部桂(朝日新聞社科学部)、浜野保樹(放送教育開発センター)、坪崎哲男(日経新聞社)、宮川隆泰(三菱総合研究所)、京都康男(ユー・ピー・ユー)

9月 山田實(さきがけ日本新党政策審議室)、野々村文宏(ナレッジ・アンド・エクスペリエンス)、磯部道一(マイクロウェア・システムズ)、Bob Johnston(WIRED)

10月 村松洋(社会経済国民会議)、加藤晴洋(日本電気)、金子誠、石原聖子(三田出版)、平林扶佐子(日本電気)、斎野亨(日経BP)、豊永郁代(NTT出版)、山崎一樹(国土庁)

11月 西尾啓伸(インテック)、大坪真一郎(大林組)、佐藤一夫(仙台市)、今井建彦(仙台ソフトウェアセンター)、小野憲男(電経新聞社)、山田良太(西日本新聞社)、折原達也(日本情報処理開発協会)

12月 松本敏・篠原稔和(内田洋行)、足



4月15日～16日の研修会で

第1回 ハイパーセミナーのご案内

本格的な地域実験の開始を前に、地元大分での新しいネットワーク利用の展望 7月22・23日
を拓く、実践的なセミナーを企画しました。最新動向、自分で触れる実習、企業利用事例など、盛りだくさんの企画です。ふるってご参加ください。

ソフトパーク

●マルチメディア・ネットワークのビジネス利用

日時：平成6年7月22日（金）

午前10時～午後5時

場所：大分市東春日町ソフトパーク・センタービル

対象者：企業関係者

定員：20名

参加費：お一人様5,000円

★賛助会員企業：無料

◆プログラム：

10:00-11:30 講演とディスカッション 世界の最新情報通信事情を知る

・公文俊平（ハイパーネットワーク社会研究所所長）

・会津 泉（同研究企画部長）

11:30-12:00 ・これがマルチメディア通信だ デモンストレーション

13:00-15:00 ・情報ネットワークの業務利用・先進企業の利用事例紹介

・杉井鏡生（インフォメーション・コーディネーター）

15:00-17:00 ・最新のマルチメディア通信の日常業務への応用 <実習>

●マルチメディア・ネットワークの市民利用

日時：平成6年7月23日（土）

午後1時30分～午後6時

場所：大分市東春日町ソフトパーク第2ソフィアビル

対象者：一般市民

定員：30名

参加費：無料

◆プログラム：

13:30-14:45 講演とディスカッション 世界の最新情報通信事情を知る

・公文俊平（ハイパーネットワーク社会研究所所長）

・会津 泉（同研究企画部長）

15:00-16:30 ・これがマルチメディア通信だ デモンストレーション

16:30-18:00 ・自分で触るマルチメディア通信 <実習>

※参加希望の方はハイパーネットワーク社会研究所大分本部までご連絡ください。

※次回ハイパーセミナーは、9月以降に開催の予定です。

立國功・榎本博之（熊本ソフトウェア研修センター）

1994年

1月 渡辺浩典（NTT出版）、眞実井宣嵩（オーム社）、中井豊（日本工業技術振興協会）、佐藤知行（ヤマキ）、福田淳一（北海道新聞東京支社）

2月 Sylviane Toporkoff(E.I.C.)、箕浦一雄（キヤノン）、大黒岳彦（NHK）、本保晃（NHK報道局科学文化部）、柴田郁夫（志木サテライトオフィス・ビジネスセンター）、蓼沼彰（大広）、小泉幸一（リアルタイム・グラフィックス）

3月 前川徹・若井英二（通商産業省機械情報産業局）、松本敏文（日本イーエヌエスAT&T）、渡辺博則（日経BP社）

4月 木内喜美男（大分県企画総室）、佐久間洋一郎・宇佐美潤祐（アーサー・D・リトル）、坂本伸之（フリーライター）、吉川尚宏（野村総合研究所）、赤木邦夫（NTT出版）、小田島弘・椎名敏雄・田中誠（リコー）、宮寄清志（日経BP社）伊藤友一（翔泳社）、潜道隆（千代田化工建設）、原真紀子（東京海上火災保険）、桂木健次（富山大学）、坂本真一（ニッセイ基礎研究所）、笛川雅史（日本経済新聞社事業局）、大須賀克己（郵政省通信政策局技術政策課長）、木村治之（読売新聞社編集局科学部）

5月 Hans Schoof（Commission of the European Communities）、沖川吉弘（NTT出版）、山本隆行（東京経済新報社）、大須賀哲司（ウイープラネット）、桜井敏昭・降旗淳平（日経BP社）、高橋徹（ジフ・デービス・ジャパン）、土屋泰一・杉山泰一・田邊俊雅（日経BP社）、西尾安裕・三谷清（ニッポン放送）、牟田昌平（日本国際交流センター）、Jonathan Friedland（Far Eastern Economic Review）、若松修・澤田喜代美（アイ・エス・ディー）、関康子（アクシス）、江崎亮（フリーライター）、望月浩一（キヤノン）、伊藤和雄・太田保光・亀山孝広・藤原達也・堀口光（通商産業省機械情報産業局）、中井毅・瀬戸屋英雄（通商産業省工業技術院）、田村久夫（通商産業省大臣官房情報管理課）、及川力哉・高石薰子（日経事業出版社）、藤元健太郎（野村総合研究所）、繁沢良・菅原章文・中井豊・松井幹雄・三嶋良武（三菱総合研究所）、津田弥生・阿部博靖（大和速記情報センター）

6月 加藤晴洋（日本電気）、David Hamilton（Wall Street Journal）、桑江曜子（キヤノン）、田村貞雄（静岡大学教養部）、竹村真一（東北芸術工科大学）、石津広也（リクルート）

●講演一覧：公文俊平所長

1993年

10月7日 構造計画研究所「新時代の情報技術---開く日米ギャップ」

23日 大分県「地域の情報化と活性化」

11月25日 社会経済国民会議「情報化シンポジウム基調講演」

30日 NTTデータ通信「アメリカで進む情報化」

12月2日 電通ニューメディア塾「ニューメディアを考える」

10日 精密工学会「情報インフラとマルチメディア」

14日 日本経済新聞社グループウェア研究会「日本型社会システム」

17日 埼玉大学「情報文明とインターネット」

1994年

1月13日 野村総研横浜「社会システムの進化と情報化」

19日 AI財団「アメリカの情報インフラ」

19日 アーク都市塾「ハイパーネットワーク社会」

21日 ニュー・プレジデント・クラブ「情報革命と新社会システム」

27日 東京都職員研修所「行政の情報化」

29日 韓国ハンベック財団「情報化と東アジア

ア」

2月25日 三木会「NII日本の位置付け。アメリカ、日本のすべきこと」

3月

12日 武藏大マルチメディア研究会「産業化の21世紀システムとマルチメディア」

31日 NTT情報システム開発部「米国でのNII構築とマルチメディア・ビジネス」

5月

19日 世界平和研究所「進展する情報革命と日本の対応」

24日 関西情報センター「ハイパーネットワーク社会は智業社会」

30日 私立大学情報化協議会「民間情報臨調の課題」

●公文俊平：新聞雑誌寄稿

1993年

12月

【新聞：オピニオン】「モース氏の発言に疑問を呈す」正論「産経新聞」931207

【新聞：解説】〔編集部〕「次世代情報通信地域を核にビジョン作り」ハイパーネットワーク社会研究所集中討議レポート「電経新聞」(ハイパー研ワークショップの紹介記事)931206

【講演予稿】「21世紀の情報インフラとマルチメディア精密工学会 931210

1994年

1月

【雑誌：論文】「万国のコンピューターが連結する日」「This Is 読売」94年1月号

【新聞：エッセー】"Competing philosophies of protection and Change" Essay:Civilizations, 「Look Japan」94.1.1号

4月

【新聞：オピニオン】「世界に通信幹線の無償提供を」正論「産経新聞」940402

【雑誌：論文】「情報権と智のゲーム」、「bit別冊」共立出版、94年4月号別冊「情報化と東アジア：日本の反省」「By LINE」、株式会社電通総研、94年4月号「情報インフラ建設の視点」「NEC創研レポート」、NEC 94年4月号

5月

【雑誌：座談会】公文俊平、関本忠弘、渡辺修「高度情報化社会実現のために」、「通産ジャーナル」、通商産業調査会、94年5月号

【新聞：インタビュー】「「情報権」の確立を急げ」マルチメディア革命、「日経産業新聞」940530

【雑誌：エッセー】「大平正芳の時代認識」、「大平正芳記念財団レポート」、財团法人大平正芳記念財団、94年5月

【単行本の一部：エッセー】「ネットワーク・コミュニティと尾野徹さん」、「電子の国「COARA」」、AI出版

●その他

1994年

5月

【テレビ：NHK】5/2 ニュース (pm7:40ごろ)、インタビュー

【ラジオ：NHK】5/24 am6:43-6:50、インタビュー

●会津 泉：講演一覧

1993年

10月

6日 JISAコンベンション'93／情報サービス産業協会「ここまでできたネットワーク」

15日 日本都市情報学会

22日 (社)社会経済国民会議「情報通信の新社会資本整備と日本の情報化格差」

26日 神戸文化・情報都市構想研究会／神戸市・(株)シー・ディー・アイ

11月

4日 日本電気基幹技術研修「ハイパーネットワーク社会」

10日 NTT静岡セミナー「21世紀に向けたデジタルネットワーク時代へのテイクオフ」

18日 富士ゼロックス(株)役員検討会「デジタル・ワールド・パラダイム」

19日 21世紀の国土を考える連続講演会／国土庁計画・調整局計画課「情報革命と交流ネットワーク」

12月

6日 通産省情報処理システム開発課「インターネット」

8日 第6回国際ワークショップ／(社)情報技術コンソーシアム「超高速ネットワーク」

13日 11th ThinkNet Commission Meeting (パリ)、「Internet: A Japanese Perspective」

17日～19日 AAAS-ABA National Conference of Lawyers and Scientists (National Academy of Sciences' Beckmans Center、カリフォルニア)

1994年

1月

21日 岡山経済同友会「米国情報化の最新動向と日本の対応」

24日 第4回次期研究テーマ検討会／(財)パーソナル情報環境協会「パソコンネットの現状、将来の使われ方」

3月

14日 キヤノン(株)研究開発推進センター「進化するネットワーク」

17日 「新都市の熟成と開発戦略」／(財)建設経済研究所「ネットワーク社会の展望」

17日 新三木会「ゴアの情報戦略」

18日 日本電気(株)宣伝企画室「コミュニケーション環境の変化～ネットワーク社会への進展」

5月

6日 Community Networks Conference (Cupertino, California)、"Community Networking in Japan"

19日 三菱マーケティング研究会「ハイパーネット社会の進展とマルチメディアビジネスの将来展望」

6月

2～3日 Europe-Japan Forum -- Cooperation and competition in the field of communications (パリ)

22日 (社)日本経済調査協議会・堤委員会「日本の市場経済を考える」／「ネットワーク社会の到来」

28日 大分県立芸術文化短期大学コミュニケーション学科「地域社会特講：デジタル・ネットワーク・パラダイム」

7月

4日 日経キャリアアップカレッジ「次世代マルチメディア環境とビジネス創造」

7日 (財)横浜工業館「米国情報スーパーハイウェイ構想のインパクト」

15日 大阪・高度情報化推進協議会「GII・NII・進化するネットワーク」

●会津 泉：新聞雑誌寄稿

1993年

10月

【雑誌連載】ハイパーネットワークことはじめ(1)】「デジタル・ネットワーク時代へのテイクオフ」【NEW MEDIA】、ニューメディア、93年10月号

11月

【雑誌：論文】「ネットワーク文化の現実と可能性」【現代のエスプリ】、至文堂、「コンピュータ文化」特集号

【雑誌連載】ハイパーネットワークことはじめ(2)】「<ネットワークのネットワーク>インターネット」【NEW MEDIA】、ニューメディア、93年11月号

12月

【雑誌：インタビュー】「テレコム・デモクラシー＜端末はコンピュータ「電話」から抜け出よ＞」【日経コミュニケーション】、日経BP、93年12月6日号

【機関誌：論文】「ここまでできたネットワーク」【JISAコンベンション'93レポート】、JISA、93年12月号

【機関誌：論文】「インターネットの意義」【MagAGENE】、国際電子ネットワーキング教育学会、93年12月号

【雑誌：エッセー】「ネットワークするかしないか？」【Shokankyo】、JCD、93年12月号

【雑誌連載】ハイパーネットワークことはじめ(3)】「だれでも使えるインターネット」【NEW MEDIA】、ニューメディア、93年12月号

1994年

1月

【講演要約】「米国情報化の最新動向と日本の対応」【岡山経済同友会会報】、335号別冊

【雑誌：論文】「広がるインターネットと米

国の<情報スーパーハイウェイ>動向」、
「bit」、共立出版、94年1月号
【雑誌連載<ハイパーネットワークことはじめ(4)>】「だれでも放送局、<双方向テレビ>は実現するか? OCN、トロントシティ-TV、SIMTVの試みに学ぶ」『NEW MEDIA』、ニューメディア、93年1月号

2月

【雑誌:書評】「デジタル革命時代を象徴する新雑誌<WIRED>」、日経コミュニケーション、94年2月21日号

【新聞:インタビュー】「いんたびゅー<利用者主役へ仕組み探る>」『朝日新聞大分版』、94年2月21日、21面

【雑誌:エッセー】「ネットワークを使いこなせ! <LAN、ISDN、ネットワークで仕事をする>」『GURU』、94年3月号増刊

【雑誌連載<ハイパーネットワークことはじめ(5)>】「NII<行動計画>と日本の取り組みとのギャップ」『NEW MEDIA』、ニューメディア、93年2月号

3月

【雑誌:論文】「ネットワーキングを考える3<インターネット>」「ダイヤモンド・エグゼクティブ」、ダイヤモンド社、94年3月号

4月

パソコン通信がつくるグローバルな地方 電子の国「COARA」

尾野 徹

地域「情報ハイウェイ」をつくる!

パソコン通信ネットワーク「COARA」の誕生から現在までの軌跡
を追う電子情報社会のドキュメント。

このドキュメントは、COARAにかかわったすべての人達の
物語であるとともに、電子ネットワークを
社会インフラとして取り入れ、全国へ全世界へ情報を発信していく
地域社会の新しい姿を示す物語でもある。

序文 平松守彦(大分県知事)

1994年4月刊・367頁・定価2400円・エーアイ出版

◆財団法人ハイパーネットワーク社会研究所

■役員

理事長 渡辺文夫(東京海上火災保険(株)相談役)
専務理事 提新二郎(大分県副知事)
所長 公文俊平(国際大学教授)
副所長 月尾嘉男(東京大学教授)
理事 加藤康雄(日本電気(株)専務取締役)
高梨裕文((株)富士通研究所常務取締役)
三原種昭(日本電信電話(株)取締役九州支社長)
大橋 純(NTTデータ通信(株)経営企画部長)
公文俊平(国際大学教授)
根橋正人((財)ニューメディア開発協会理事長)
園山重道((財)移動無線センター会長)
月尾嘉男(東京大学教授)
浜野保樹(放送教育開発センター助教授)
監事 荒木信正((株)大分銀行常務取締役)
植木哲哉((株)豊和銀行常務取締役)

■賛助会員

(株)アスキー (株)大林組
アップルコンピュータ(株) 鬼塚電気工事(株)
(株)イントック 鹿島建設(株)
(株)内田洋行 キヤノン(株)
梅林建設(株) (株)熊谷組
(株)S C C 九州電力(株)
(株)N H K エンタープライズ コクヨ(株)
(株)大分銀行 五洋建設(株)
大分ケーブルテレビ放送(株) (株)佐藤組
大分航空ターミナル(株)

【機関誌:論文】『アメリカの新しい情報化の流れ』『Televolution』、DDI、94年4月号

5月

【機関誌:論文】『地域ネットのパワーアップ

』『自治体国際化フォーラム』、自治体国際化協会、94年5月号

【書籍:序文】『前奏曲—なぜ人工生命なのか』、『人工生命』人工生命研究会編、5月30日、同文書院

■評議員

青柳武彦(日本テレマティーク(株)代表取締役社長)
今井賢一(スタンフォード日本センター研究所長)
宇津宮孝一(大分大学工学部教授)
小野準一(日本放送協会会長室統括部長)
釜江尚彦(ヒューレットパッカード日本研究所取締役 情報研究所長)
北矢行男(多摩大学教授)
清原和也(九州電力(株)取締役情報通信部長)
園田善一(日本アイ・ビー・エム(株)常務取締役)
高原友生((株)シー・アール・シー総合研究所代表取締役会長)
田中 譲(北海道大学工学部教授)
永次 廣((株)安川電機取締役企画部長)
西 和彦((株)アスキー代表取締役社長)
八戸信昭(東京都立科学技術大学教授)
松尾三郎((株)エス・シー・シー代表取締役会長)
三浦一郎((株)東芝常務取締役営業本部副本部長)
村井 純(慶應義塾大学環境情報学部助教授)
渡部国男(キヤノン(株)研究開発本部副本部長)

(五十音順)

次号予告

原稿募集

お問い合わせは

◆次号の発行予定
1994年10月10日

◆特集テーマ
地域コミュニティとコミュニティ・ネットワーク

※北海道、仙台、桐生、大阪など
日本各地域の地域ネットワーク
の最新状況についての特集を予
定しています。

「Hyper Flash」では、皆さんの原稿を募集します。皆さんの身近なネットワークや地域コミュニティに関する話題、日ごろハイパネットワークについて考えていること、ハイパー研について言いたいことなど、どしどしハイパー研宛てにお寄せください。

電子メールでお願いできれば幸
いです。

e-mail:hyper@glocom.ac.jp

(財)ハイパーネットワーク社会研究所
大分本部
〒870 大分県大分市東春日町51番8
ソフィアプラザビル4階
TEL:0975-37-8180
FAX:0975-37-8820

東京事務所
〒100 東京都千代田区霞が関3-3-1
尚友会館2階
TEL:03-3506-8180
FAX:03-3506-8181
e-mail:hyper@glocom.ac.jp

増刷・好評発売中

NTT出版

情報文明論

公文俊平

来るべき「智識文明」を
示唆する文明の進化論

文明史観を構築する理論的基礎としての「社会システム論」とその「文明論」への発展。日本の近代文明の特質を明らかにしつつ、文明の進化の諸層と来るべき「智識文明」の在り様を探る。著者多年の理論的考察の集大成。

1994年4月刊

503頁・定価 5500円

内容目次

第I部 文明とその進化

第1章：文明と文化
第2章：文明の多系統進化論

第II部：社会システム

第3章：主体
第4章：主体間の相互作用
第5章：複合主体
第6章：社会システム
第7章：社会システムとしてのネットワーク

第III部：情報文明の諸相

第8章：日本の文明と文化
第9章：近代文明の進化過程
第10章：情報文明の様相

NTT出版

進化する ネットワーク

会津 泉

注目のネットワーク進化論

「マルチメディア革命」、「情報スーパーハイウェイ」、「インターネット」。デジタル技術の進歩が、21世紀へ向かう社会システムを大きく動かす。パソコン通信からインターネット、さらにバーチャル・リアリティから人工生命まで、自らの利用体験と海外現地取材を基に、グローバルな視点から事実を徹底的に分析し、日本の企業と個人の進むべき方向性を示す。

1994年7月刊

342頁・定価 2400円

HYPERRFLASH 第2号

1994年7月10日発行（季刊）

発行人：財団法人ハイパーネットワーク社会研究所
大分本部 〒870 大分県大分市東春日町51番8

東京事務所 〒100 東京都千代田区霞が関3-3-1 尚友会館2階
e-mail:hyper@glocom.ac.jp

編集責任：会津 泉

編集：山本葉子
TEL:0975-37-8180 FAX:0975-37-8820

TEL:03-3506-8180 FAX:03-3506-8181